140周年特集

母校創立から140周年

新たな歴史へ　粛然と記念式典

母校は今年9月1日、明治6（1873）年の創立から数えて140年の節目を迎えた。創立140周年を祝う記念式典は開校記念日の同日、秋田県民会館に来賓・同窓会員・教職員・生徒・保護者らおよそ1500人が出席して、厳粛な雰囲気の中で行われた。母校は次の1ページを刻む新たな歴史へと踏み出した。

母校の始まりは明治6年9月1日、秋田市東根小屋町日新学校内に洋学科を増設、洋学校と称した明治時代の黎明期にさかのぼる。太平学校、秋田県師範学校、秋田県立秋田中学校などと校名を変えながら明治、大正、昭和の動乱期をくぐり抜け、現在の秋田県立秋田高校と改称したのは、戦後の混乱がまだ色濃く残る昭和28年のことであった。

校舎も東根小屋町から手形校舎（現・秋大教育文化学部敷地）を経て、終戦直後の校舎難から石油学校、国民学校での仮住まい、秋田駅前の旧陸軍第17連隊兵舎の代用と苦難の連続であった。

手形中台の現在地に移転して既に51年。元号は昭和から平成に変わった。明治から平成に至るこの140年の間に母校を巣立った卒業生は3万7千人を超えた。

時折薄日の差す記念式典当日の朝、県民会館入口に通じる通路には出席者を迎える生徒たちの長い列ができていた。次々とやってくる出席者一人ひとりに「おはようございます」「ありがとうございます」と大きな声をかけて感謝の気持ちを表した。統率のとれた生徒たちの爽やかな挨拶に出席者たちも思わずにっこり。「おはよう」「ご苦労さま」と言葉を返すすがすがしい光景が繰り広げられた。

見事な生徒主体の運営　品格ある式典に賛辞

式典は午前10時、吹奏楽部による「秋田県民歌」の演奏で幕を開けた。進行はすべて生徒会が担当、ともに2年生の武田詢生徒会長、豊島菜々子副会長の司会で物故者に黙とうを捧げた後、3年生の前行事企画管理室長吉田匠汰君が力強い言葉で開会宣言を行った。

高橋貢校長（昭和47卒）は式辞の中で、まず秋高140年の歴史を振り返り、関東大震災や先の大戦など過去幾多の困難を乗り越えて時代を切り拓いてきた先人の功績をたたえた。

そしてドイツの哲学者カントの墓碑銘「ああ、いかに感嘆しても感嘆しきれぬものは、天上の星の輝きとわが心の内なる道徳律」を引き合いに出して、生徒たちにこう訓示した。

「これからいかなる困難に遭遇しても、どんなにつらい状況に陥っても、常に自分の内なる道徳律を自覚し、人間を信じて生きていってほしい」

続いて挨拶に立った豊口祐一同窓会長（昭和34卒）が、「母校は同窓生にとって青春の心のふるさと、これからも県中等教育の核として発展を遂げることを期待している」と述べた。

来賓を代表して米田進県教育長（昭和45卒）は、現在の手形中台校舎から巣立った卒業生が既に2万2500人に及んでいる点に触れ、今ほど校歌にある「おのれを修めて世のためつくす」という言葉が重要な意味をもつ時はないと祝辞を述べた。

さらに生徒を代表して3年生で前生徒会長の佐々木捷君が挨拶。佐々木君は「地球温暖化などいま地球全体が大きな危機に直面しており、私たち秋高生に求められているのは日本だけでなく世界で活躍することだ」と力強く決意を述べた。

式典は同窓会や学校発展に功労があった丸山健氏ら8人を表彰、最後に全員が起立して吹奏楽部の演奏で校歌を全5番まで斉唱し、およそ40分で終了した。

休憩をはさんで橋本五郎読売新聞特別編集委員（昭和40卒）が「真のリーダーとはどうあるべきか」と題して記念講演を行った。

記念式典の運営については準備から当日の運行まで生徒たちが主体的に関わった。その式典は簡素にして品格があり、生徒たちの清潔感あふれる挙措、けれん味のない進行には出席者の間から賞賛の声が上がった。

記念式典が無事幕を閉じると、会場からはひときわ大きな拍手が生徒たちに送られた。

笑顔あふれた記念祝賀会

記念祝賀会は会場を秋田キャッスルホテル放光の間に移して午後1時半から開催された。

出席者は当日飛び入りの26人を含む440人。県選出衆参院議員、県議会議員をはじめ県教育委員会、歴代校長、県内各高校長、学校評議員、